様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２５２７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２８６２

研究課題名（和文）聴覚・視覚等障がい者と共に楽しむユニバーサルな音楽・美術鑑賞プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a Universal Music and Art Appreciation Program that Can Be Enjoyed by Anyone, Including Visually and Hearing Impaired Persons

研究代表者
高木　夏奈子（TAKAGI, Kanako）

植草学園大学・発達教育学部・教授

研究者番号：５０５３１６２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：徳島県立近代美術館と協働し，障がいの有無や年齢を問わず参加者を「どなたでも」として音楽と美術を同時に楽しむユニバーサルなワークショップを実践した。聴覚障がい者には手話通訳者の手配や音を振動で感じることができる機器の準備、視覚障がい者には絵画の触察図を準備する等に加え、自由な鑑賞を保障する共感的・受容的な場の創出により、様々な人の鑑賞を共有して参加者全員が音楽と美術を楽しむ実践を志向した。また、同様のワークショップが他機関でも実施可能となるよう、実施時の留意点を抽出・整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　人は音楽を聴覚だけではなく「身体」全体で感受している。様々な感覚を活性化して音楽と美術を共に楽しむワークショップを実践し、音楽・美術鑑賞の思考過程における「身体」性について考察した。
　上記実践を踏まえて、障がいのある人もない人もすべての人に開かれたユニバーサルな音楽・美術鑑賞プログラムの開発を企図した。様々な状況にある人たちが合理的な配慮のもと同一条件で共に活動することは、誰にとっても相対的に自己を理解することを促す機会となり、インクルーシブな共生社会の実現に寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：Collaboration with the Tokushima Modern Art Museum enabled the organization of universal music and art workshops considering anyone for participation regardless of age, whether or not they have a disability, etc. In addition to arranging to have a sign language interpreter for the hearing impaired, preparing devices that enable vibrations from sounds to be felt, and providing tactile charts of paintings for the visually impaired, an accepting and sympathetic place that guarantees unfettered appreciation was created with the aim of having a variety of people share their appreciation of music and art so that all participants could derive enjoyment. Key points for implementation were also extracted and organized, so that similar workshops could be carried out by other organizations.

研究分野：音楽教育　音楽教育哲学

キーワード：ユニバーサル　音楽鑑賞　聴覚障がい　美術鑑賞　視覚障がい

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

報告者は、平成 20 年告示小学校学習指導要領音楽科の改訂の柱の一つであった「言語活動の充実」について、同じ芸術科目である美術教育における「対話型ギャラリー・トーク」「対話による美術鑑賞教育」に注目し、徳島県立近代美術館が作成した教材「鑑賞シート」の発問等の分析を契機に、同館で音楽と美術を共に楽しむワークショップ（以下、WS と記述）を行なうこととなった。

同館は 2011 年からユニバーサルミュージアム事業を実施しており、合理的配慮のもと、様々な障がいのある人の WS への参加を積極的に推進していた。報告者が 2015 年に実施した音楽を造形で表す WS に、聴覚障がい者 A さんが参加され、音楽を身体で感じ味わう姿に接し、聴覚障がい者の「音楽」鑑賞の可能性と、音楽の「身体」性について探究するという本研究の最初の着想が生まれた。

音楽を身体全体で感じるのは健聴者も聴覚障がい者も同じであり、聴覚に障がいをもつ人を対象にその音楽の享受の思考過程を分析すれば、身体に立脚したより本質的な音楽鑑賞についての考察が可能になると考えた。さらにその後、聴覚障がい者だけでなく視覚障がい者も健常者も共に参加する WS を行い、様々な人が一緒に活動することによる参加者の学びを体験し、障がいのある人もない人も全ての人に開かれた音楽・美術鑑賞プログラムの開発という本研究の着想に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、「身体」の働きという観点から音楽・美術鑑賞の思考過程を分析することと、それに基づく障がいのある人もない人もすべての人に開かれた音楽・美術鑑賞の WS を実践し、それを踏まえて他機関でも実施可能なプログラムを開発することである。

３．研究の方法

障がいの有無や年齢を問わずに参加者を「どなたでも」として、徳島県立近代美術館と協働で音楽と美術を共に楽しむ WS を実践した。活動においては、聴覚障がい者の参加については手話通訳者の手配に加え、音を振動で感じることのできる機器（抱っこスピーカーHug Me（Ensound）または Ontenna（富士通））を準備した。視覚障がい者の参加については、可能な範囲で触察図を用意したり対話で作品を共有したりした。

主な活動内容は、次の二つである。

・音楽を鑑賞して、その音楽を造形的に表現する活動

・音楽を鑑賞して、その音楽に合う作品を展示室で選ぶ活動

いずれの場合も、参加者全員で、制作作品または鑑賞した作品について、感じ考えたことを言語化し共有する場を設定した。

研究期間中に行った WS は以下のとおりである。

（1）「和の音色で楽しむ美術鑑賞」（2020 年 9 月）

「小さなお子様連れの家族や、海外にルーツのある人にも楽しんでもらえるように和楽器に親しんだり、音楽に合う作品を探したりする活動を行います。音楽や作品からどんなことを感じたのかなど、みんなで楽しく意見交流します。」として同じ内容の活動を 2 回実施した。

参加者は、1 日目は聴覚障がい者 1 名、視覚障がい者 1 名、発達障がい者 1 名、日本国内で就労している外国籍の方 1 名を含む成人 10 名、2 日目は、聴覚障がい者 1 名、知的障がい・難聴の重複障がい者 1 名、子どもが小学生の親子 3 組 10 名を含む 14 名だった。

活動内容は以下のとおりである。①楽器（琴・三味線・篠笛）の紹介。②生演奏でそれぞれの楽器の音色を味わう。③実際に自分で琴の音を出してみる。④「琴の音を色で表すとしたら？」という指示で色紙を選び、その理由を共有する。〔その後展示室に移動して〕⑤それぞれの楽器のフレーズ（録音）を聴きながら展示作品（5×5 の 25 マスの中に様々な形が表現されている作品）を鑑賞し、「（作品の 25 個のマスで）この音色に合うものは？」という発問で考え、意見を交換する。⑥他の楽曲の CD を聞きながら、音楽に合う作品を会場の展示作品から選び、その鑑賞を共有する。⑦WS に参加しての感想を共有し、アンケートに回答する。

（2）「音・色・かたちで楽しむ鑑賞タイム」（2021 年 9 月）

コロナ禍により対面での WS は困難だったため、Zoom による同時双方向オンラインで WS を行った。時間は 90 分で、同日の午前・午後の２回、同じ内容で実施した。

午前の参加者は、8 グループ 12 名（未就学児 2 名、小学生 1 名、成人 9 名）、午後の参加者は 6 グループ 10 名（小学生 2 名、中学生 1 名、成人 7 名、うち 2 名視覚障がい者）だった。報告者は自宅（千葉）から配信した。視覚障がい者 2 名は美術館にヘルパー1 名と来館、Zoom 等の操作を美術館職員 2 名が補助し、美術館からの配信者とは別室で参加した。

活動内容は以下のとおりである。①「今から流れる楽器の音を形で表すとしたら？」という指示で楽器（スティールパン）の 2 音による複数の和音（録音）を聴き、「線描画シート」（A4 に 7 つの図形を印刷）から図形を選び、各自が色鉛筆等で色を塗りオンラインで共有する。（シー

トは事前に送付。図形はいずれも不規則で「とがった複数の角のあるもの」「渦巻き」「千鳥のような花びらのようなもの」等。）②同じ楽器による曲の一部分の演奏（1 分程度。録音）を繰り返し聴き、美術館所蔵の 8 絵画作品（印刷して事前に送付した上、画面でも共有）から曲に合う作品を選びその理由を共有する。③楽器・演奏者・曲の紹介と活動のふりかえり。④後日、アンケートに回答する。

（3）「身体で感じる・身体で味わう　音楽×美術で楽しむ鑑賞・表現ワークショップ」（2022 年 9 月）

「展示室で短い曲のメロディーやリズムのイメージに合う作品を探して対話による鑑賞をします。音楽を聴き、粘土を用いて音楽のイメージを表現してみたいと思います。」として対面で実施した。

参加者は、聴覚障がい者 1 名、視覚障がい者 2 名、視覚と聴覚の重複障がい者 1 名、家族と共に参加したダウン症児 1 名を含む 17 名である。

活動内容は以下のとおりである。①スティールパンの生演奏を聴いてその印象を粘土で造形表現する。（その際、手の感覚に集中するために、希望があった晴眼者はアイマスクをつけて取り組む。）②作品を他の参加者と共有し、音楽とともに鑑賞する。〔その後、〕③展示室で造形作品を鑑賞し、④同楽器の生演奏による 3 曲（演奏者のアレンジによる曲想が異なる短い曲）を聴いて、どの曲が造形作品のイメージと合うか対話鑑賞を行う。④WS に参加しての感想を共有し、アンケートに回答する。

本 WS では美術館の許可を得て、視覚障がい者が手袋をして造形作品に触れ、その感触についての情報を他の参加者に提供した。また、聴覚障がい者は 0ntenna を用いると共に、直接楽器に触れてその振動を感じて活動に参加した。

（4）「音楽と色彩のワークショップ」（2023 年 9 月）

徳島県立近代美術館の特別展「イロのひみつ」の関連イベントとして実施した。

参加者は、聴覚障がい者 1 名、視覚障がい者 3 名、小学生 2 名を含む 14 名である。

活動内容は以下のとおりである。①〔美術館ロビーで〕カリンバの音色に合う色紙を選び、その理由を共有する。〔その後、展示室に移動し、〕②展示室の 1 区画の複数の絵画作品を鑑賞する。③CD（ピアノ曲）を聴いて、どの作品と合うかを考え、選んだ作品とその理由を共有する。〔ロビーに戻り、〕④CD で別の楽曲を聴きながら、そのイメージを、段ボール紙を丸・三角・四角等に切り様々な色で着色した小片を台紙上に張り付けて造形活動を行う。⑤作品と、制作して感じ考えたことを全員で共有し、アンケートに回答する。

これらの実践について、①制作作品、②鑑賞の感想等を共有する際の参加者の発言、③事後アンケート、④成人の参加者を対象とした半構造化インタビュー調査、をもとに考察した。

４．研究成果

報告者が実施した、美術館の展示室で音楽を流して展示作品と共に音楽を鑑賞する、という WS は、徳島県立近代美術館との協働であったからこそ可能になった実践である。

徳島県立近代美術館は、年齢や障害の有無に関係なく、誰もが安心して自分らしく鑑賞を楽しむことのできるユニバーサルミュージアムを目指しており、そのインクルーシブな取組みによって 2023 年 5 月に国土交通省バリアフリー化推進功労者大臣表彰を受けている。本研究期間中に同館で教育普及を担当していた亀井幸子氏と相談しながら、美術館の展示作品とそのレイアウト等を所与の条件として、展示作品に合うと思われる鑑賞曲等を選択し、準備、実践を行った。

その結果、下記の成果が得られた。

（1）参加者の事後アンケートから

いずれの WS においても、参加者から「音楽と美術を同時に鑑賞するのが新鮮だった」「様々な参加者の感じ考えを知り鑑賞が広がった」「障がいのある人とない人が共に活動できて価値観が変わった」という趣旨の回答を得た。

音楽と美術を共に楽しむ活動においては、「音を聴く」ことによって視覚的イメージも変わってくるなど、共感覚的に複数の感覚が活性化されることにより身体全体での感受が可能になる。聴覚障がい者 A さんからは、「音楽と他の表現を比較することで、ただ受動的に聞いたり見たりするのではなく積極的に思考したり感じようとしたりできた。」「きこえない私にとって『音楽』は『リズム感のある振動』と捉える。その振動の心地良さが、様々な記憶やイマジネーションを呼び起こすことが、芸術的な欲求を満たしていくことにつながっているんではないかと思えてくる。」という記述が得られた。

（2）インタビュー調査から

勤務校における研究倫理委員会の承認を得て、2022 年の WS の事後に、成人の聴覚障がい者１名と視覚障がい者２名を対象に半構造化インタビューを実施した。

聴覚障がい者 A さんは、インタビューにおいて、以下の経験を語られた。

・小さいときから絵を見るのが好きだった。
・エッセン〔の作品を〕一緒に見ていた母が、「音が聞こえるような絵だね」と言った。いろいろな形の、いろいろな色が配置されていて、お互いに音が響き合う感じがした。
・中学生の時に、カンディンスキーを見て音楽を感じたことがあった。
・クレーの絵を見たときに、ペンの線でリズムを感じた。

そして「今まで頭に蓄えた景色とかイメージと結びついて、頭の中に音を作る自分だけの鑑賞方法を続けてきた。」と述べている。

先天的な盲である、視覚障がい者 B さんは「イメージ」について、「なんか、頭の中で浮かぶ。」「目の見える人は絵とか図とか見えるんだろうけど、私は、そういうものは無関係に、結局、いままでの自分がしてきたことから、思うんだろうな。」「言葉じゃないよね。でも、まあ、子どもの時にお遊戯しとったから、これ、踊るような、とか、そういう子どもの時の体験から出てくるものなんでしょうね。」と語っている。

障がいによって、作品から情報を得る手段になんらかの制約があるとしても、人が何かを感じ考えるとき、例えば芸術の鑑賞においても、今までの経験の蓄積がイメージを生じさせる源泉であり、その思考過程は本質的に健常者のそれと変わらないことが示唆された。

（3）プログラム開発における留意点

他機関で同様の WS を実施する際には、それぞれの美術館や会場の実際に合わせて活動を調整する必要がある。個別の具体的な状況はそれぞれ異なると予測されるため、実施する際の留意点として以下を抽出した。

① 情報保障と会場設定

聴覚障がい者への情報保障としての手話通訳者の手配のため事前申し込みが必須である。また視覚障がい者が帯同するヘルパーの座席も確保するために参加人数を調整し、安全な動線を確保したうえで、会場内の人と物の配置情報を視覚障がい者に提供するとよい。

② 受容的・共感的な場の創出

活動開始時のアイスブレーキングとともに、活動中の肯定的な声掛けによって、参加者は安心し自信をもって活動に取り組めるようである。そのためにも、ファシリテーターが全体の進捗状況を確認しうる人数（報告者はおおむね 20 名以下で実施した）で行うことが望ましい。障がいのある人の参加とその合理的配慮について全員で情報共有すること、この活動に「正解や間違い」はなく、どの鑑賞も尊重されることを最初に明確に言語化して共通理解を図ることが必要不可欠である。

③ 導入となる補助的な活動の設定

「音楽」「図画工作（美術）」「体育」という学校教育における教科区分に慣れている多くの参加者にとっては、音楽と美術を同時に楽しむことはなじみのない活動であるようだ。最初のステップとして、取り組みやすい課題（「この音色に合うと思う色紙を選んで、その理由を発表する」等）から始めるとその後の活動にスムーズに発展できるようである。

④ 活動における合理的配慮

聴覚障がい者には、可能であれば演奏中の楽器に直接触れられる場を設定するとともに、音を振動で感じられる機器を活用する。このような機器は日進月歩であるが、健聴者と全く同じ経験ができるわけではない。音のある・なしや強弱の変化は感受できても、楽器による音色の違いや、多声音楽や和音などの音の重なりを感受することは難しい。機器の特性を事前に十分に把握し、振動等によって感じ取りやすいリズム・音量・テンポなどに特徴がある曲を選択する必要がある。

視覚障がい者には、造形作品に触ったり「触察図」を用意したりして、自身の感覚で鑑賞できる場を設定することが望ましい。しかし、「触察図」の作成が困難な作品もあり、他の参加者との会話によって作品を想像して鑑賞を楽しむことも意義深い。いずれにしても、作品数を絞り、自身で触って、または会話によって作品を感受するための時間を十分に確保することが必要である。

⑤ 障がい者の主体的な参加を可能にする継続的な関わり

活動中のみならず、その前後においても、「障がい者」＝「支援を受ける人」ではなく、「他の（健常者を含めた）参加者を支援する人」となりうる主体的な参加を可能にする仕組みの構築（例えば、活動の前後においてイベントサポーターとして WS の運営について参画する等）が重要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 髙木 夏奈子	４．巻 16
２．論文標題 聴覚・視覚等障がい者と共に楽しむ ユニバーサルな音楽・美術ワークショップの実践と考察	５．発行年 2024年
３．雑誌名 植草学園大学研究紀要	６．最初と最後の頁 13～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24683/uekusad.16.0_13	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 髙木夏奈子
２．発表標題 聴覚・視覚等障がい者と共に楽しむ音楽・美術鑑賞プログラムの開発（1）―美術館との協働によるユニバーサルなワークショップからの考察―
３．学会等名 日本音楽教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 髙木夏奈子
２．発表標題 聴覚・視覚障がい者と共に楽しむ音楽・美術鑑賞プログラムの開発（2）―美術館との協働によるオンラインワークショップの試行―
３．学会等名 日本音楽教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 髙木夏奈子
２．発表標題 聴覚・視覚障がい者と共に楽しむ音楽・美術鑑賞プログラムの開発（３）
３．学会等名 日本音楽教育学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	亀井　幸子 (KAMEI Sachiko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関